

第332回山口西田読書会（2023年6月3日開催分）の Protokol

大藤 渉

1. テキスト：「場所」「四」の第4段落 270 頁 8 行目から同段落 271 頁最後まで

2. キーワードないしキーセンテンス

「真の無の場所に於ては意志其者も否定せられねばならぬ、作用が映されたものとなると共に意志も映されたものとなるのである。」(271, 11-12)

3. 考察及び問い

西田は、「述語的方向に述語を超越し行くことによって、単に映す意識の鏡が見られ」(270, 12) という。単に映す鏡は、「無の場所」(271, 7-8) や「永遠なるもの」(271, 12) ともいわれる。つまり、単に映す鏡は、「(意識する) 意識」、「無の場所」、「永遠なるもの」である。しかし、述語的方向の極地が「意識」や「永遠なるもの」と考えられるとき、あらゆる動的な働きはつねに「影」に転じ、否定されてしまう。そのため、「場所」の体系では「単に映す意識の鏡」を破るような「何か」は想定されえない。これでは、「無の場所」は問えない前提のままにとどまるのではないか。